

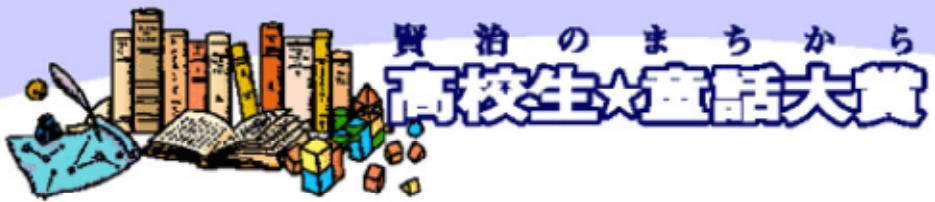
第 12 回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「にこにこ」

青森県立五所川原高等学校 2 年 長谷川 愛瑠



賢 治 の ま ち か ら
全国高校生★童話大賞



優秀賞 〈銀の星賞〉

『じじじじ』

青森県立五所川原高等学校二年

長谷川

愛瑠なるる

「いただきっ!!」という声とともに、司つかみの手から本がぬき取られました。本を奪った将じやうは、いつも一緒にいる涼平じやうへいとニヤニヤ笑っています。司は「返して!!」

と言いながら将の持っている本に向かって手をのばした：つもりでした。でも実際は、司の口からは何の音も出ず、ただパクパクと開いたり閉じたりしただけで、のびした手も本には届きませんでした。

「ほらほら、取ってみるよ。」

「金魚みたいに、口パクパクしてないで何かしゃべろよ。」

将と涼平にからかわれ、司は顔が熱くなり、泣きたくなりました。

(まただ：。)

結局、司は二人があきて本を返すまで、一度も口を開きませんでした。

小さいころから、司は話すのが苦手でした。幼稚園でもほかの子のようにハキハキと話せず、それは小学校に入学してからも変わりませんでした。そのため、国語の時間に音読する時も、しょっちゅうつかえたり、声が小さくて先生に注意されていました。一生懸命話しているつもりでもクラスメイトに笑われ、そのたびに司は真っ赤になってうつむいてしまうのでした。休み時間に司がいつものように自分の席で本を読んでいると、クラスメイト達の声が耳に入ってきました。

「保健室のとなりにある、『じじじじ』ってなに?」

「さあ、でもたまに人の声するよな。」

司の学校ではクラスは1組、2組と数字で分けられています。保健室のとなりにある教室だけは、なぜか『じじじじ』とされていたのでした。

そのことは司も前から気になっていたもので、そとときき耳をたてました。

「あれはしょうがい者が行くところだよ。」



クラスメイトの中心で、得意そうに言ったのは将でした。
「しょうがい者？」

よくわからないといった顔をしたクラスメイトに対し、
「しょうがい者ってのは、目が見えなかったり、耳が聞こえなかったり、ふつうとはちがうヤツのこと。兄ちゃんが言ってた。」

と将は誇らしげに説明していました。へえ〜というクラスメイトのおどろきの声に包まれ、上機嫌になった将は司の席に近づき、

「しゃべれない司くんも『ここにこ学級』に行ったほうがいいんじゃない？」
といじわるなことを言いました。クラスメイト達の笑い声にがまんできず、
司は机につっぱしてしまいました。

その日の放課後、司がいつものように図書室に行くと、見たことのない子が座って本を読んでいた。色白でおかっぱ頭のとてもかわいらしい女の子です。司はちよつとドキドキしてしまいました。

(同じ年だと思うけど…どこのクラスだろう?)
しかしもちろん司にそんなことが聞けるはずありません。女の子を気にしながらも、司は借りる本を探していました。

(あれ?)
ふと司の手が本棚の前で止まりました。そこには司が今読んでいるファンタジーのシリーズが並んでいるのですが、一か所だけポツカリとすき間が空いています。そこには司が今日借りるつもりだった本が置かれているはずでした。

(もしかして…)
司が女の子の方を見てみると、予想どおりに司が探している本を読んでいた。どうやらちよつと読み終えたところらしく、パターンと本を閉じています。しかしそれを本棚に戻さずに、わきに置いていた別の本を読み出していました。

(どうしよう…)
司は早くその本を読みたくて、うずうずしてきましたが、女の子はそんな司に全く気づく様子もありません。しばらく迷った後、司は勇気をふりしぼって女の子に声をかけました。

「あ、あの…ばく…その本借りたいんだけど…。」



なんとかかしぼり出した声はとても小さく、震えていました。女の子は司の方をふり向きもしません。

「あの…その本…」

司はさっきよりもがんばって大きな声を出しました。しかし女の子は何の反応も示しません。

(無視されてるんだ…)

司は涙が出そうになるのを必死でこらえました。そのとき、ふと女の子が顔を上げ、司の方を見ました。女の子と目が合い、司はなんだか逃げ出したような気持ちになりました。

女の子はというと、目をいっぱいに見開き、まるでたった今司の存在に気がついたかのような表情でした。しばらく二人は見つめ合ったまま黙っていましたが、いたたまれなくなった司は図書室から走って出て行ってしまいました。

次の日の放課後、司は日直だったので花だんの水やりをしていました。水やりを終え、ジョウロを片づけていると、校舎のかげにだれかがいるようです。のぞいてみると、一人の女の子が絵を描いていました。

「あっ！」

司は思わず声を出してしまいました。昨日図書室にいたあの子だったからです。女の子も司に気がつきました。司がどうしようかと迷っていると、女の子は持っていたスケッチブックを閉じ、別のノートに何か書きこんでいます。

(何してるんだろう?)

司が不思議に思っていると、

女の子はそのノートを司に見せてきました。

『きのうはごめんなさい。』

ノートにはきれいな字でそう書かれていました。

「え?」

司が驚いた顔を見ると、女の子はまたノートに書きこみます。

『わたしは耳が聞こえません。だからきのうしつれないことをしたかも思っ
つて…。』



司は突然のことになにがなんだかわからず、女の子の顔を見つめてしまいました。女の子は困ったような顔をしています。

「いや、えっと…ぼく…」

と司はゴニョゴニョと言いかけて、ハツとしました。

(これじゃ伝わらない…)

少しの間ためらい、司は女の子にノートとクレヨンを貸してくれるよう、身振り手振りで頼みました。初めはとまどっていた女の子も司の言いたいことが分かったのか、ノートとクレヨンを差し出しました。司は真っ白のペー
ジに、

『ぼくの方こそ、急に走って行ってごめんなさい。』

と書きこみ、女の子に見せました。女の子はちょっとびっくりしたようでしたが、司に向かってはにかみながら笑顔を見せました。司は思わず赤くなり、ノートに急いで

『名前はなんですか?』

と書き、女の子に渡しました。あわてて書いたので、ずいぶん汚い字になってしまいました。

(読めるかな…)

司は不安になりましたが、女の子は

『春日^{かすが}えみです。あなたは?』

と書き、司に手渡しました。

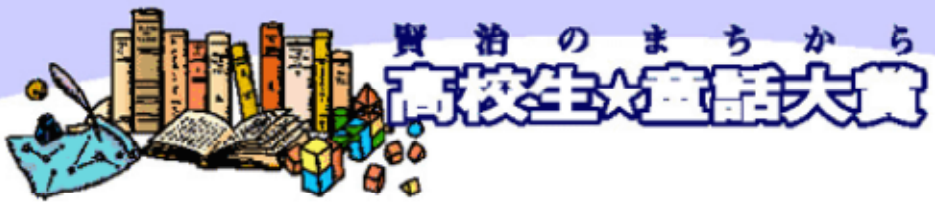
『本田^{ほんだ}司^{つかさ}です。』

司はそう書いたノートをえみに差し出しました。しばらくノートを見つめていたえみは、

『よろしくね。』

と書きこみ、にっこりと笑いました。

その日から、司とえみは放課後によく会うようになりました。二人はノートをつかっていろいろなことを話しました。司はえみについてたくさんのことを知りました。えみは『ここにこ学級』に通っていること、『ここにこ学級』に通っているのはえみ一人なので、司が初めての友達だということ、司が読んでいたファンタジーのシリーズが好きだということ、絵を描くのが得意だということ…。司は放課後が楽しみになりました。えみといるとなんだか心



がポカポカするからです。なによりえみは、司がうまく話せなくてもバカにしたり、笑ったりしません。そのことが司にとって、とてもうれしく感じられました。

ある日、司はえみに、自分が話すのが苦手だということを打ちあげました。えみは司の話を聞いたあと、ノートに書きこみました。

『だれにでも苦手なことはあるよ。』

『わたしは音を聞くのが苦手だけど、気にしてないの。』

えみはきれいな字で書き続けます。

『耳は聞こえなくても、こうして司くんとお話できるし、毎日たのしい。』

ノートを司に見せると、えみはふふふと笑いました。ちょっとだけほっぺが赤くなっていました。司は

(えみちゃんは、ぼくよりもずっと大人みたいだなあ。同じ年なのに…) と思いました。そしてえみに返事を書こうとしたとき、後ろからえみの名をよぶ声がしました。えみは聞こえていないので、司はチョンチョンとえみの肩をつついて教えてあげました。かけよってきたのは『にこにこ学級』の早川先生です。先生はえみに向かって、なにやら手を動かしています。えみもうなずきながら、それを熱心に見たあと、先生に向かって手を動かしました。司はそれを知っていました。手話しゅわです。でも実際に目の前で見たのは初めてでした。なんだかえみが、急に遠くへ行ってしまったように感じました。先生との対話を終えると、えみは

『今日は早く帰るやくそくだったのを忘れてた。ごめんね。』

とノートに書き、あやまる仕草をしました。司は首を横にふり、

『べつにいいよ。手話できるんだね。』

と書きました。えみは少し照れくさそうに

『ちよっとだけね。今勉強中なんだ。』

と書きこみました。そして二人は手をふり合いながら別れました。その日、司は家に帰ってからお父さんのインターネットで手話について調べました。次の日の放課後、いつものようにえみと会った司は、両手の人さし指を向かい合わせ、互いに曲げました。それを見たえみは信じられないというような表情をしてかたまっていきます。

(あれ、『こんにちは』ってこっぴつじゃなかったっけ？ まちがえたのかな……)



司があせって混乱していると、えみは目をキラキラさせながら司に向かって手話で何かを伝えようとしています。司はあわててノートに

『ごめん。まだ少ししか分からないんだ。これからおぼえようと思って……』と書き、えみの顔をうかがいました。えみは

『じゃあわたしも教えるよ!』

と書き、心底うれしそうに笑いました。司も

(これでえみちゃんともっとなかなかなれるかも……)

とうれしくなりました。それから司はえみに教えられたり、自分で調べたりして、一生懸命手話を練習しました。そのおかげで、えみとかなんな対話ならできるようになりました。司はとても幸せでした。

いつものように司はえみといました。えみは学校の校舎の絵を描いています。えみの絵は、司よりも司のクラスメイトよりもとても上手でした。司がえみのスケッチブックをのぞいていると、突然スケッチブックが浮かびあがりました。

「司くん。」

ニヤニヤといじわるい笑いを顔にはりつけて、えみのスケッチブックを奪ったのは将と涼平でした。

「なんで……」

呆然ぼうぜんとしている司にむかって将は

「最近みように楽しそうだと思ってたけどさ。まさか司くんが『ここにこ学級』に入ってたとはね。」

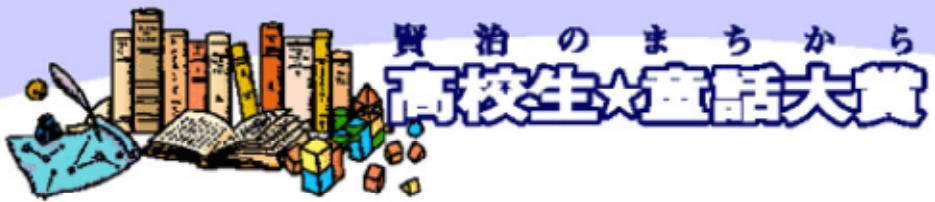
と言いました。意味がわからず司が

「え?」

と聞き返すと、

「だってその子『ここにこ学級』の子だろ?」と涼平がえみを指さしながら言いました。えみは状況がよくわからず困惑しています。

「いっつも二人でいるからてっきり司くんも『ここにこ学級』に入ったのかと思って。まあ、しょうがい者はしょうがい者といえるのがおにいだよな。」と将がバカにしたように言い、涼平はゲラゲラと笑っています。司は顔が熱くなるのを感じました。はずかしいからではありません。『ここにこ学級』や



えみをバカにした二人を心の底から許せないと思いました。こんなに腹が立ったのは生まれて初めてでした。

「バカにするな!!」

司は二人に向かって大声でどなりました。二人はびっくりして司を見ている。司自身、自分がこんなに大きな声を出せるとは思っていませんでしたが、そのまま続けました。

「えみちゃんは音を聞くのが苦手なだけだ。しょうがい者とかそんな言い方すんな!! 『ここに二学級』のなにか悪いんだよ!!」

一息に言うと、司はハアハアと息を弾はずせました。しばらく呆あつ気けにとられたように将も涼平も黙っていました。

「司のくせに、エラそうなことやってんじゃねーよ!!」

声を荒げた将は、突然司をつきとばしました。

「うわっ!!」

司は思いきりしりもちをつきました。

「教室ではイジイジしてるくせに…なに急にキレてんだよ。バツカじゃねーの?」

将は座りこんだままの司に向かって次々とひどい言葉をかけます。司も何か言い返そうとしましたが、のどがつまってしまったかのように声が出ません。

(さっきは大きな声が出たのに…)

司は泣きたくなくなってきました。そのときどこからか女の子の声がありました。それは今まで一度も聞いたことのない声でした。司も将も涼平も、同じ方向を見ました。

「や……め……て……」

えみは必死に声をしぼり出していました。その声はとても聞きづらくて、司も初めは何と言っているのかわかりませんでした。それでもえみは顔を真っ赤にさせながら、何度も何度も同じ三文字をくり返していました。

(えみちゃん……あんなにがんばって……)

司はなんだか胸がいっぱいになりました。すると将が

「はあ? 何言ってるのかわかんねーよ!!」



とえみに向かって言いました。えみは何と言ったか聞こえませんが、将の表情などから感じとったのでしょう。大きな瞳に、みるみる涙がたまっています。それを見たとき、司は思わず

「あやまれよ!!」

と将に言いました。おどろいている将の手からえみのスケッチブックをうばい返すと、司はそれをえみに手渡しました。

『だいじょうぶ?』

司が手話でそう聞くと、えみは服のそでで目をこすりながら、コクンとうなずきました。ホッと安心した司は、ふり返って将と涼平の目を真っすぐににらみつけました。

「こ、今度えみちゃんを泣かせたら、ぜ、ぜったいゆるさないからな!!」

司はおなかに力をいれて、精一杯の大声で言いました。とちゅう何回かつかえてしまったけど、そんなの気になりませんでした。

(えみちゃんがあんなにがんばったんだ……ぼくもがんばらないと!!)

そのまましばらく三人はにらみ合っていました。

「……涼平、行くぞ。」

と将が言い、二人はきまりが悪そうにして帰って行きました。司はふうと息をつきました。よっぽどきんちようしていたのか、体中あせだくで、ひざも少しふるえています。ふいに、司の肩をえみがたたきました。司がふり返ると、えみは左手を下向きにし、右手をまるで包丁のように左手にトンとあてました。それを見た司は、ちょっと照れくさくなってえへへと笑いました。

『ありがとう。』

そう伝えたえみは、にこにこ笑っていました。

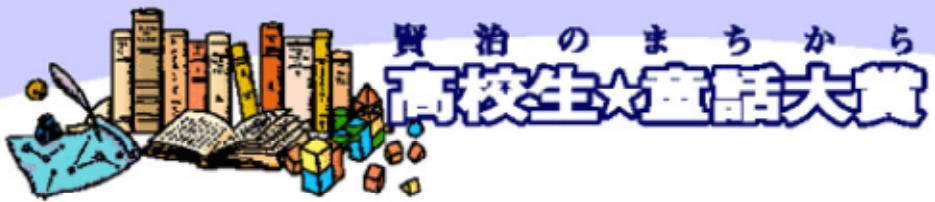
次の日、司が教室の自分の席にいと、将と涼平が近づいてきました。

(やっぱり来た……)

司は少しきんちようしましたが、ぐっとこらえて二人を見つめました。

「なに?」

司は、はっきりとした声で言いました。教室にいたほかのクラスメイトたちは、司がそんな声を出すとは思っていませんでしたので、びっくりして司に注目しました。それでも司は、下を向きたいのをがまんして、二人を見続けました。



将も涼平も司を見たまま何も言いません。

「……昨日は悪かったよ……。」

長い間だまったままだった将が、ぼそつと言いました。つづいて涼平も「ごめん。」

と言いました。司はポカンとしていましたが、

「べつにいいよ。」

と言いました。将も涼平もほっとした顔をしました。

「それと……その……」

将はまだ何か言いたそうですが、言いにくいのか、「ゴニョゴニョと口もついています。

見かねた涼平が

「司、手話できるんだろ？」

と司に言いました。

「うん、少しだけ。まだ勉強中だから……」

と司が答えると、

「それ、おれたちにも教えてくれ。」

将が、とても真けんな口調で言いました。

「え？」

思いがけない将のたのみに、司がふしぎそうな顔をする

「お、おれたちもあの子にちゃんとあやまって……その……仲よくなりたいんだ……。」

と将はあわてたように早口で言いました。気のせいか、顔が赤くなっています。将と涼平は不安そうに司の方を見ました。司は

「もちろん。いいよ」

と言いました。将と涼平は顔を見合わせ、

「よっしゃー!!」

と大よろこびしています。

(えみちゃん、友達がふえてよろこぶだろうなあ……)

司はえみのよろこぶ顔を想像して、なんだか自分もうれしくなりました。

「これ、見て。」



賢治のまちから
高校生★童話大賞

司は二人に見えるように両手の人さし指を向かい合わせ、互いに曲げました。きょうみしんしんといった様子の二人に、司は「これは『こんにちは』って意味なんだ。」と大きな声で言いました。